2Da-8

# 漬物の嗜好と摂食にみられる地域差・世代差
## ー伝承食品におけるＨＭＲの背景と影響考察の指標としてー

○高橋 洋子(新潟大)、勝田 啓子(奈良女大)

**目的：** 古くから各地の家庭で、地域性を反映した漬物が作られてきた。一方、漬物は保存性が高いこと等から、市販品としても早い時期から流通し、いわばHMRの先鞭となった食品とも言えるであろう。そこで、本発表では漬物の食嗜好・手作り状況・市販品摂食状況を地域・世代比較し、今日における漬物の実状を探り、HMRの背景・影響について考察する。

**方法：** '99年9月～12月、東京(T)・大阪(O)・新潟(N)の3地域において、各々大学生の母親(u)と幼稚園児の母親(k)の2世代を対象としてｱﾝｹｰﾄ調査を郵送で行い、6群を比較した。

**結果：** ｱﾝｹｰﾄの配布総数2,634、回収率50.2%、有効n=1,283。(1)食嗜好:「漬物を食べたいと思う度合い」は、3地域ともu>kで、「毎食」(u=31.8%、k=16.5%)、「月1～2回」(u=4.2%、k=13.7%)等の回答構成であった。(2)手作り:①家で漬物を漬ける家庭の割合は、N>T>Oかつu>kで、Nu=95.3%～Ok=49.3%。②市販の"漬物の素"を「いつも」または「たまに」使用している家庭は、①のうち約40～60%。③漬ける品目は、6群とも「浅漬・一夜漬」が多く、「NはT・Oに比べ、ぬかみそ漬が少なく、味噌漬が多い」という地域差も見られた。(3)市販品：①6群とも概ね95%以上の家庭で市販の漬物を購入していた。②沢庵・ｷﾑﾁ・福神漬・梅干は、全体の50%以上の家庭で購入されていた。購入品目について、「NはT・Oに比べ、梅干が少なく、味噌漬が多い」等の地域差が見られた。③摂食頻度については、O>T>N、u>kという傾向が見られた。(4)手作り品と市販品の併用状況:回答者の漬物摂食ﾊﾟﾀｰﾝを{手作りのみ・併用・市販品のみ・食べない}の4つに分類したところ、6群とも「手作りのみ」と「食べない」は僅少、「併用」が最多、「市販品のみ」の家庭の割合は、O>T>Nかつk>uで、Ok=47.4%～Nu=4.2%。